

都市デザイン研究部と喜多方プロジェクト合同栃木調査

アーケード撤去後の町並みなどウオッチング

5月28日(土)、都市デザイン部と喜多方プロジェクトの共同企画で栃木市を訪れた。案内は野原卓助手のお友達で都立大大学院生時代に栃木市について研究した修士の渡辺恵子さん。参加は野原助手、M2 内山隆史、M1 早坂勝一、鈴木智香子で、視察はアーケード研究に取り組む都市デザイン部、ふれあい通り商店街のアーケード撤去問題を抱える喜多方プロジェクトの関心事だった。(鈴木智香子 M1)



帰り際駐車場にて(左から)内山隆史、野原卓助手、早坂勝一、渡辺恵子さん



前日にトラックが突っ込んだ蔵



とちぎ蔵のまち美術館



蔵の街大通りを歩く鈴木智香子(左)と渡辺恵子さん

朝8時半、五月祭初日で、バイクでたこ焼き用の?タコが届くなどの赤門から、野原助手運転の車で栃木へ向かった。11時ごろ栃木市街へ入った。「蔵の街観光館」を訪れ、午後は観光館で栃木市のまちづくりをテーマとした都市住宅学会の部会にオブザーバーとして参加後、「山車会館」、「とちぎ蔵のまち美術館」を見学した。山車会館では、5年ごとの「とちぎ秋祭り」の映像を観て山車に心躍った。

14時をすぎ、アーケードを撤去した「蔵の街大通り」を一見すると、黒漆喰の重厚感のある蔵が多く残っているものの、渡辺さんの修論「住民意識からみた歴史的資源を活かした中心市街地活性化の実態—栃木市の修景事業を事例として—」に掲載されている「蔵の街大通り」の当時の写真と現在の町並みを比較しながら歩くと、数年前にあったはずの蔵が今は無くなっていることに気がついた。大通りから奥に入り、蔵が生活に息づいている「日光例幣使街道」を抜け、念入りに整備された巴波川沿いの遊歩道を歩いた。その途中、大正時代の洋風建築物である栃木病院では、内部見学もできた。

「アーケード撤去後の町並みをみる」という当初の予定以上に、様々な刺激を受けた一日だった。

<部活:都市デザイン研究部メッセージ>

青春。 黙々と白球を追い続けた日々。オレンジの夕陽がまぶしかった日々。白いキャンパスの上で明日の都市について喧々譁々語りあった日々。そんな純粹でかむしゃらな**都市デザイン魂**を呼び起こすのが「部活:都市デザイン研究部」であります。日々のプロジェクトと少し離れ、各々が考える「都市デザイン」について探求し、深め、楽しむことが目標です。それでいて甲子園を目指す高校野球のように高い都市デザインへの目標と成果を目指します(今のところ出版・投稿・技術開発・おしかけ提案など目指しています)。**いざ、青春。**(本年より30代の野原より)



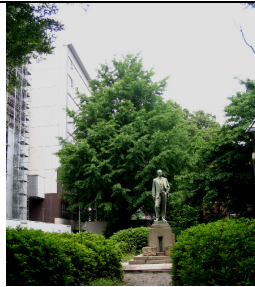
日本語力 ハノイから留学の院生チーさんは、昨秋の研究室/ノイ旅行を現地で受け入れ、大成功させました。今春から工学部2号館で週1回日本語トレーニングを受講し、日々驚くほど上達して表情も輝きっぱなし。「日本語はむずかしいけど、漢字の音読はベトナム語と似ておもしろいです」と語りました。チーさんと会話を!

第3回研究室会議 第3回研究室会議は6月9日(木)に開かれた。メインはM2の研究発表で、内山隆史「民間都市開発における事業者と市民の自発的な協働によるデザインの可能性」、大谷剛弘

「近隣商店街の空間維持のための基礎的研究」、田辺康弘「集客施設運営型コミュニティビジネスを活用したまちづくり手法に関する研究」、戸田惣一郎「温泉地のデザイン」だった。

工学部1号館前広場

設計コンペ



J. Conder

わが研究室(左ビル)の斜め前庭！
安田講堂前広場と並ぶ重要空間。
コンドル先生も応募待っています。

工学部主催の1号館前広場設計コンペが行われます。都市工14号館の斜め前の広場で、わが研究室の庭でもあります。参加資格は東大学部生・研究生・院生（博士課程を除く）、北沢猛助教授も審査員です。

・提出物 パネル1枚(841mm×594mm)、縦横自由、タイトル、説明文、図面、模型写真等を適宜。

・締切 6月30日17時・提出先：工学部1号館景観研究室。参照<http://keikan.t.u-tokyo.ac.jp/1gou/>

本 だ な



季刊70507
都市デザイン
研 健筆

特集1「景観法を实践する」では、都市デザイン研究室関係者5人、特集2「都市文化の再生 横浜市の試み」では、北沢助教授が執筆、あわせて誌面の3分の1あたりの40ページを占めている。

特集1 西村教授「景観まちづくりの課題と景観法」、今春修士になった永井ふみ石塚デザイン事務所(OG)「世田谷区風景づくり条例に見るボトムアップの風景づくり」、岸田里佳子国交省都市・地域整備局都市計画課課長補佐(OG)「景観法活用のポイント」、野原助手「普通のまちに「良好な景観」をつくる」、窪田垂矢工学院大学助教授(OG)「経済上の要請と景観整備をどのように調和させていくか」、西村教授「インタビュー「秋田県角館まちなみ保存運動の高橋雄七」など圧巻である。

特集2 北沢助教授が「創造都市と自治体改革」と題して、横浜市の「文化芸術創造都市構想」(クリエイティブ・シティ)を詳述。同助教授が委員長の「文化芸術と観光振興による都心部活性化委員会」の最終報告に基づく。推進本部もできている。

★『景観法と景観まちづくり』(学芸出版社、5月10日発行)

西村教授序説「景観法の意義と自治体のこれからの課題」、窪田垂矢工学院大学助教授ほか「バリアフリーと景観は矛盾するの的一对立から止揚へ」、出口敦九州大学助教授ほか「海峡を挟む関門景観形成(北九州市、下関市)および「沿道修景美化条例による沿道景観形成(宮崎県)」。安藤義和(博士課程)も「自然風景地における景観行政と自然公園法(箱根町)」執筆。3000円+税。

★『シリーズ都市再生1成長主義を超えて一大都市はいま』(日本経済新聞社、05年5月)北沢助教授27~56頁。窪田垂矢OGも執筆。3200円+税。

★西村教授編著『都市美』(学芸出版社)の「アメリカの建築条例の起源と歴史」を執筆した坂本圭司氏は、昨年博士課程単位取得のOBです。

本誌配布コンセプト「研究者は昔の文献探しに懸命です。そうした文献はこのマガジンのように、誰かがコツコツとつくったものです。将来、誰かがこのマガジンを発見し、あつ文献だといって論文のヒントに?ということがあられるかもしれません。それに青春の思い出に、読んで保管していただければうれしいです」というのが編集部の願いです。

OG便り



仙道秘書は私と同じ演劇人です。父は、仲間と町田市に市民オーケストラを作りました。芸術家肌の両親に生まれ、高卒後すぐ劇団入りし、富山県利賀村で世界演劇祭開催に関わり、90年からは水戸芸術館で役者として関わりました。研究室にお世話になっていた時、皆さんの研究姿勢に熱いものを感じていました。つわりがおさまったら、研究室に伺いたいと思います。<福地(旧姓原田)実子前秘書>

編集後記

CGを駆使している研究室なのに、本誌が素朴な編集誌面なのは、プレゼンテーションと違ってシンプル編集が昔から報道に適しているからでもあります。しかし、編集デザインのレベルアップの声が出始めていますので、この先内部コンペのようなことが行われ、プレゼンと報道を止揚した技法による誌面刷新の日がくるのを念願しています。またこのところ研究室陣の図書出版と執筆が増え、メーリングや掲示に出版案内が躍動しております。(酒井)

